

北京語声調交替規則の適用領域について

馮, 蘊澤

<https://doi.org/10.15017/2332561>

出版情報 : 文學研究. 90, pp.131-157, 1993-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



北京語声調交替規則の適用領域について(*1)

馮 蘊 澤

0. はじめに

本稿は北京語声調交替の適用領域がどのような条件に基づいて指定されるかについて考察する^(*)2)。

周知のように、北京語は声調言語で、音韻論的に四種類の音節声調を区別する。声調交替とは、4種類の声調の内、第3調の音節同士が隣接するとき、先行の第3調音節が第2調と交替する、即ち [3]+[3] の連続が [2 3] となって実現する現象である。次の例が示す通りである。

- (1) 良い 酒……良い酒。

hao jiu……hao jiu

3 3 2 3

従って、声調交替の規則は一般的に次のように述べられる。

- (2) 声調交替規則 (Tone Sandhi Rule 以下TSRと略す)

3 → 2 / ____ 3

しかし、この規則は、二つの第3調音節が連続するという、最も単純な場合についてしか述べていない。第3調音節が三つ以上隣接する場合、TSRの適用がより複雑になる。例えば次の例で示されているような場合である。

- (3) 私が／買う／酒……私が酒を買う。

wo mai jiu.

3 3 3

(a).(3) (2 3)

(b).(2 2 3)

- (4) 私が／買う／老酒……私が「老酒」を買う。

wo mai lao jiu.

3 3 3 3

(a).(2 3)(2 3)

(b).(3)(2 2 3)

(c).(2 2 2 3)

これらの3音節以上の三調連続において、声調交替の方式は幾つもある。即ち、(3-b), (4-c)のように、発話全体を一つのトン・グループ (Tone Group以下TGと略す) にまとめ、TSRはこれを適用領域として一斉に適用することも出来れば、(3-a, 3-b, 4-a, 4-b)のように、いくつかの小さいTGに分割して、これらの小さく分割された領域のなかでTSRがそれぞれ適用することもある。従って、TGがどのような条件に従って分割、あるいは合併されるのか、即ちTSRの適用領域がどのように指定されているかが問題である。

この問題について今まで多くの研究が行われているが、次の節ではまずこれらの先行の研究について検討していく。

1. 先行の諸研究について

1-1. IC構造に基づく韻律構造のモデルについて

Shih (1986) では、TSRの適用領域が表面的な統語構造とは必ずしも一致しないことから、これをリズム、韻脚などに関連づける一方、直接構成素構造 (Immediate Constituency以下IC構造と略す) という、特別な統語構造の条件に基づく韻律構造としてとらえ、Foot Formation Rule (以下FFRと略す) を提案している。

(5) Foot Formation Rules (FFR)

I. Foot Construction

a.Immediate Constituency (IC):Link immediate constituents into disyllabic feet.

b.Duple Meter (DM):Scanning from left to right,string together unpaired syllables into binary feet,unless they branch to the opposite direction.

II. Superfoot Construction

Triple Meter (TM):Join any leftover monosyllable to a neighboring binary foot according to the direction of syntactic branching.

FFRによれば、いわゆる正常な条件 (Nomal Conditions) 下ではTSRは義務的にICに基づいて指定されたfeetの内部で繰り返して適用される。こうして得られるのが最も自然な (natural) な声調交替形式であるという。例えば次の例のようである。

(6) 胆／小さい／鬼……臆病もの

[[dan-xiao] gui]

3 3 3

Cycle 1 [[2 3] 3]

Cycle 2 [[2 2] 3]

(6)の例は左枝分かれ構造の例であるが、当然予想されるように、右枝分かれ構造の場合、cycle 1におけるTSRの適用の結果、再適用の環境が破壊されてしまい、Cycle 2での適用が阻止されてしまう、すなわち、結果的にはいわゆる「右枝分かれの制約」(窪園1992)が北京語でも有効であるように見える。次の例の示す通りである。

(7) たいへん／胆／小……大変臆病だ

[hen [dan-xiao]]

3 3 3

Cycle 1 [3 [2 3]]

Cycle 2 [3 [2 3]]

もちろん、FFRではTSRがSuper FeetやPhonological Phrase全体に適用される

ことも認められる、そのとき同じ構文は次の(8-b), (9-b)のようにも実現される(ft=feet, ft'=superfeet)。しかし、同時に、これには厳しい「速さの制限」を受けなければならない。即ちより「速いスピード」、あるいは「非常に速いスピード」での発話に於てのみ、Super feet, Phonological Phrase全体での適用が認められ、従って、(8-b), (9-b)のような形式は、naturalな形式とは区別されており、いわばmarkedなものとされている。

- (8) 胆／小／鬼……(臆病もの)

[[dan-xiao] gui

3 3 3

[] ft

[] ft'

- (a) [3 [2 3]]

- (b) [2 2 3]

- (9) たいへん／胆／小……(大変臆病だ)

[hen [dan-xiao]]

3 3 3

[] ft

[] ft'

- (a) [3 [2 3]]

- (b) [2 2 3]

FFRでは、次の例が示すように、TSRの適用領域が必ずしも統語構造と完全に一致しないような声調交替の現象についても説明できる点で、単に表層の統語構造に適用領域を求めるより、優れている。

- (10) 李さん／買う／良い／米……李さんがよい米を買う。

lao li mai hao mi

3 3 3 3 3

Cycle 1 [[[2 3] 3] [2 3]]]

Cycle 2 [[[2 2] 3] [2 3]]]

しかし、同時に、FFRにはいくつかの問題も含まれている。

まず、右枝分かれの構造では、FFRのスピードの制限により、事実上枝分かれ方向の制約が課されることになっている、このため、naturalな声調交替形式として [3 [2 3]] の形式しか認められい。これは内部最小構成素が語彙項目の場合（例えば(11)）はうまく当て嵌まるかも知れないが、純粹に統語構造関係の場合（例えば(12), (13)）、Hung (1989) も指摘しているように、かならずしもそのような制約を受けず、寧ろ (b) の形式 [2 2 3] のほうが自然であることさえある。

- (11) 紫／チョーク……紫色のチョーク

[zi [fen-bi]]

3 3 3

(a) [3 [2 3]]

(b)* [2 2 3]

- (12) 私／買う／酒……私が酒を買う。

[wo [mai jiu]]

3 3 3

(a) [3 [2 3]]

(b) [2 2 3]

- (13) いつも／思う／行く……いつも出かけようと思う。

[zong [xiang zou]]

(a) [3 [2 3]]

(b) [2 2 3]

明らかに、このような現象が生じるのはスピードの制限や、枝分かれ方向の制約と言うより、構成素性質の問題である。というのは、(11)の内部構成素は語彙項目で充てられているからである。（この問題については、後の節で詳しく述べる。）

また、いわゆる中間埋め込み構造の「前置詞句」文の声調交替形式についても、例えば(14)、(15)のように、3種類の可能な形式のなか、FFRに従えば、(a)の形式しか説明できず、(14-b)、(15-b)の形式は不可能か、自然な形式から除外されてしまう。

- (14) 私／向く／北／行く……私が北へ行く。

[wo [wang bei] zou]

3 3 3 3

- (a) [3 [2 2] 3]

- (b) [2 3] [2 3]

- (c) [2 2 2 3]

- (15) あなた／比べる／私／早い……あなたは私より早い。

[ni [bi wo] zao]

3 3 3 3

- (a) [3 [2 2] 3]

- (b) [2 3] [2 3]

- (c) [2 2 2 3]

実際、同じ構文に対して、いくつかも声調交替の形式が可能な場合、その中でどの形式が最も自然であるかは、けっして絶対的なものではなく、談話的、語用論的な条件などによって異なることがある。例えば次の(16)のような構文に対して、(a) (b)の形式とも可能であるが、具体的な発話の場面がなければ、どの形式が最も自然であるかは限定できるものではない。しかし、具体的な発話場面に置いて、例えば(16)のように、それぞれの発話における「強調したい内容」、即ちフォーカス（ の部分）の違いによって、最も自然な形式が異なることがある、（もちろん、このような時でも、他の形式が不可能を意味するものではない。）

- (16) 私／比べる／あなた／早い……私はあなたより早い。

[wo [bi ni] zao]

- 3 3 3 3
- (a) [3 [2 2] 3]
- (b) [2 3] [2 3]
- (c) [2 2 2 3]

従って、声調交替の形式について、可能な形式と自然な形式とは別の問題である。具体的な発話の場面や語用論的な条件がなければ、適格性について可能な形式がすべて平等である。FFRでは、feet, super feet及びphonological Phraseでの適用という三つの条件を合わせて、初めて可能なすべての形式を派生することができる。言い換えれば、いわゆるIC構造の条件に基づくfeetだけでは、可能な形式のなかの一部しか派生できない。従って、TSRの適用領域指定に関して、ICも、feetもそれほど重要な条件ではない。

1-2. 意味単位に基づくSUC (Sense Unit Condition) モデルについて

Hung (1989) では、ShihのFFRの不備を指摘したうえ、これに更にChen (1984) の意味単位の条件 (Sense Unit Condition=SUC) を加えることによって、FFRの改訂版を提案している。SUCとは具体的には次のような内容である。

(17) Sense Unit Condition (SUC):

Two constituents C_i, C_j form a sense unit if (a) or (b) is true
of the semantic interpretation of the sentence:

- a. C_i modifies C_j (a head).
- b. C_i is an argument of C_j (a head).

これによって、Sense Unit Conditionに合致する構成素だけが同一のTGに編入され、意味的にmodifyまたはargument関係にない要素同士が同一のTGへの編入が排除される。例えば次の(18)のように、IC構造として一通りの解釈、即ち(a)の交替形式にしか合致しないfeetが存在しないのにもかかわらず、(a)と(b)のような二種類以上のhead-modifier/argument関係が存在するため、SUCによれば、(a)の形式も、(b)の形式も予測可能である。(()=SUs)

- (18) 私／買う／米……私は米を買う。

[wo [mai mi]]

3 3 3

- (a) (wo (mai mi))

[3 [2 3]]

- (b) ((wo mai) mi)

[[2 2] 3]

また、次の(19)では、SU (Sense Unit) 構造が (a) のようにしか解釈できないため、(b) のような声調交替形式が不適格になる。

- (19) 小さい／雨／傘……小さい傘 (雨傘)

[xiao [yu san]]

3 3 3

- (a) (xiao (yu san))

[3 [2 3]]

- (b)* ((xiao yu) san)

*[[2 2] 3]

さらに、前の節で述べた中間埋め込構造の「前置詞句」についても、FFRでは (a) の形式しか説明出来ないのに対して、意味単位の構成が二通りの解釈が出来るので、従って、よりよい解釈が出来るという。例えば次の例が示す通りである。

- (20) 靴／させる／足／腫れる……靴が足を腫れさせる。

[xie [shi jiao] zhong]

1 3 3 3

- (a) (xie (shi jiao) zhong)

[1 [2 2] 3]

- (b) (xie shi) (jiao zhong)

[2 3] [2 3]

このように、SUCでは、FFRに意味単位の条件を加えることにより、右枝分かれ構造について、IC構造では説明できない声調交替形式でも、意味単位の構成に対応していれば説明できるため、より多くの事実が説明出来るようになっている。このため、FFRより一歩前進したともいえる。しかし同時に明らかのように、SUCについて、次の二つの問題が指摘できよう。1, SUCはFFRよりもさらに多くの条件を必要とする。2, 右枝分かれ構造のなかで、意味単位の解釈と、声調交替形式が完全に対応する場合もあれば、同じ音節連続に対して意味単位の解釈が一つしか出来なくても、声調交替形式が二通りも可能な場合がある。後者のような場合は問題である。次の例を見てみよう。

- (21) 小さい／雨／傘……小さい傘（雨傘）

[xiao [yu san]]

3 3 3

- (a) (xiao (yu san))

[3 [2 3]]

- (b) * ((xiao yu) san)

*[[2 2] 3]

- (22) 買う／小さい／傘……小さい傘を買う。

[mai [xiao san]]

3 3 3

- (a) (mai (xiao san))

[3 [2 3]]

- (b) * ((mai xiao) san)

[[2 2] 3]

- (23) 買う／二／茶碗……二碗のお茶を買う。

[mai [liang wan]]

3 3 3

- (a) (mai (liang wan))

- [3 [2 2]]
 (b)* ((mai liang) wan)
 [[2 2] 3]

(21)では意味単位の構成と声調交替形式が対応しているので、SUCに対する支持例としてあげることができる。(22, 23)では (b) の意味単位の解釈が成り立たないのにもかかわらず、それに対応する声調形式が可能である。従って、SUCに対する反例である。

ところが、(21)・(23)の三例を詳細に検討すると、実はSUCが支持される(21)の例が必ずしも一般的なものとはいえないことが分かる。つまり(21)の内部構成素の [yu san] (傘) は、上の節でFFRのときにも示した(9) [fen bi] (チョーク) の例と同様、かなり語彙化された、あるいは純粹に語彙項目である。従って、それより先行の要素が同一のTGに組み込まれないのが寧ろその構成素としての特殊性のためと考える方が妥当である。このことは(22, 23)のような純粹な統語構造関係をなす構成素の例と比較すれば一層明らかである。従って、北京語声調交替現象の事実として、SUCが支持される(21)のような、意味単位構成素と声調交替形式が一致する例より、(22, 23)のような、意味単位の構成が声調交替形式と一致しない例、即ちSUCに対する反例のほうがより一般的である。

また、先程(20)で示したように、所謂中間埋め込み構造の「前置詞句」に関して、SUCではより多くの可能な声調交替形式が説明出来るようになっているが、反面、その意味単位の解釈の方では逆に無理が生じて、強いては全く違う意味単位の解釈にさえなりかねない。例えば次の二例に対して、Hung (1989) では (a), (b) のように意味単位を分析して、声調交替形式との一致を強調している。

- (24) 猫／比べる／犬／小さい……猫は犬に比べて小さい。

[mao [bi gou] xiao]

3 3 3 3

- (a) (mao (bi gou) xiao)

- [1 [2 2] 3]
- (b)* (mao bi) (gou xiao)
- [2 3] [2 3]
- (25) 私／向く／北／行く……私が北へ行く。
- [wo [wang bei] zou]
- 3 3 3 3
- (a) (wo (wang bei) zou)
- [3 [2 2] 3]
- (b)* (wo wang) (bei zou)
- [2 3] [2 3]

しかし、(24)では本来 (mao (bi gou) xiao) … (猫が (犬より) 小さい) のような意味単位構成であるにも関わらず、SU分析によると、(25-b) のように (mao bi) (gou xiao) … (猫が 比べる) (犬が 小さい) として分析することもでき、実際の意味とは完全に違う解釈になっている。(25)もこれと同様で、本来 (私が (北へ) 行く) の意味が、(b) のように、(私が 向く) (北が 行く) という違う解釈になっている。これらの例をHungはSUCの支持例として用いたが、実際上の(22)、(23)と同様で、意味単位の構成と一致しない例で、反例である。

以上、FFR及びSUCの問題点を中心に述べてきたが、次の節では、我々の提案と比較しながら、これらの問題を更に言及することにする。

2. TSR適用領域の指定 (TG形成) と構成素領域の条件

これまで繰り返して述べてきたように、北京語では、一定の構文に対していくつもの声調交替形式、即ち何通りのTGが可能であるのが特徴である、この特徴は我々が声調交替の規則、とりわけTSRの適用領域について考える際に最も注目すべき事実の一つであると考ええる。

次の例は、並列関係にある四つの3調単音節単語が並ぶときの声調交替の可能な形式を示している。

(26) マンガン／かりユウ／マグネシウム／ルテシウム

	meng,	jia,	mei,	lu;
	3	3	3	3
(a)	3	2	2	3
(b)	2	3	2	3
(c)	2	2	2	3

このように、音節間に特別な統語論的な境界が存在しない場合、TGの形成は基本的に自由である。しかし、次の例のように、一定の統語構造が存在する場合、声調交替の可能な形式が制約をうける。例えば (27-a) のように、同一の構成素に含まれる二つの音節 ([lao li]) を別々のTGに分割されることは許されない。

(27) 李さん／買う／良い／酒……李さんが良い酒を買う。

	[[lao li]	[mai	[hao jiu]]]
	3	3	3 3 3
(a)	*3	2	3 2 3
(b)	2	3	3 2 3
(c)	2	2	3 2 3
(d)	2	3	2 2 3
(e)	2	2	2 2 3

この点に焦点を絞って更に詳しく見ることにしよう。最初に、まず左枝分かれ構造の例から見ることにする。

(28) 果物／酒……果実酒

	[[shui guo]	jiu]
	3	3 3
(a)	[[2 2]	3]

(b) [[2 2 3]

(c) * [[3] [2 3]]

(29) 選挙する／私／良い……私に投票するのがよい。

[[[xuan ju] wo] hao]

3 3 3 3

(a) [2 3] [2 3]

(b) [[2 2 2] 3]

(c) [2 2 2 3]

(d) * [[3] [2 2 3]]

(29-a) の適用順序については後でさらに詳しく述べる必要があるが、(28-c), (29-d) などの不適格形を除いて、上記二例のなかのすべての適格形では、TSRの適用領域と統語構造との関連性、即ち構成素単位の領域との間に対応関係が見られる。例えば(28-a)の形式は最下段の構成素の[shui guo]と対応しており、(28-b)はより上段の構成素の[shui guo jiu]と対応している。また、(29)では(a,b,c)の適用領域がそれぞれ最下段からより上の各段の構成素単位の領域と対応している。逆に(28-c), (29-d)はどのレベルの構成素とも対応していないので、不適格である。

次はさらに右枝分かれ構造の例を見てみよう。

(30) 犬／咬む／私……犬が私を咬む。

[gou [yao wo]]

3 3 3

(a) [3 [2 3]]

(b) [2 2 2]

(31) 私／探す／小犬……私が小犬を探す。

[wo [zhao [xiao gou]]]

3 3 3 3

(a) [2 3] [2 3]

(b) [3 [2 2 3]]

(c) [2 2 2 2]

これらのすべての可能な声調交替の形式を派生するTSRの適用領域は、どれもいずれかのレベルの構成素単位の領域と対応していることは容易に分かる。

((31-a)におけるTSRの適用順序については(29-a)と同様、後で詳しく述べる。)

TSRの適用可能な領域は構成素の領域と一致するという事実は、つまり、音節同士がまず構成素単位にまとまりを成し、TGを形成する。TSRはこれらのTGの内部を適用領域として適用されることを示唆するものである。即ちTGの形成は構成素の領域を条件とすることが明らかである。構成素領域の条件は次のように述べることができる。

(32) 構成素領域の条件

もし音節 $x, y, \dots, z$ が同一の構成素の内部に含まれているなら、これらの音節が同一のTGに編入されることが可能である。

構成素領域の条件に基づいて、一定の構文に対して構成素の数だけTG、即ちTSRの適用領域が形成でき、逆に、構成素領域と一致しない音節連続が排除される。

TSRが構成素領域の条件に従って指定されるそれぞれのTGのなかで一斉に適用される。

では、具体的に適用領域がどのように指定され、また規則がどのように適用されるかについて、上に挙げた(29)と(31)の例を用いて、更に詳しく見ることにする。とくに(29-a)、(31-a)の適用について注目されたい。

(33) 選挙する／私／良い……私に投票する方が良い。

[[[xuan ju] wo] hao]

(a) [[[3 3] 3] 3]

適用領域[]

cycle 1 [[2 3] [3 3]]

cycle 2 [[2 3] [2 3]]

(b) [[[3 3] 3] 3]

適用領域[]

cycle 1 [[2 2 3] 3]

cycle 2 [2 2 2 3]

(c) [[[3 3] 3] 3]

適用領域[]

cycle 1 [2 2 2 3]

(34) 私／探す／小さい／犬……私は小犬を探す。

[wo [zhao [xiao gou]]]

(a) [3 [3 [3 3]]]

適用領域 []

cycle 1 [3 [3 [2 3]]]

cycle 2 [2 3] [2 3]

(b) [3 [3 3 3]]

適用領域 []

cycle 1 [3 [2 2 3]]

cycle 2 [3 2 2 3]

(c) [3 [3 [3 3]]]

適用領域[]

cycle 1 [2 2 2 3]

(33)の [[[xuan ju] wo] hao] に対し、その構成素の構造に対応して、それぞれ (a), (b), (c) の三種類のTG, 即ちTSR適用領域が指定される。また(34)も同様に、[wo [zhao [xiao gou]]] に対して、構成素の数だけ、それぞれ (a),

(b), (c) の三種類の適用領域が指定される。同一の構文に対するこれらの幾つかの可能な適用領域は、他の談話的、語用論的な条件がない限り、適格性に関してすべて平等である。

具体的な適用の過程において、それぞれの適用領域の間に、その元となる構成素単位の違いによって、TSRの適用方法、及び最終出力形も異なることがある。TSRの適用の過程として、おおざっぱに次の二通りがある。

一、左枝分れ構造では、所定の範囲における適用が終わった段階でなお単音節の3調音節が残り、しかもそれが先行のTGの中の最後の3調音節と隣接して引き続き3調連続を成している場合、冒頭で示した声調交替規則も引き続き適用でき、3調音節の連続がなくなるまで繰り返し適用される。例えば(34-b)の例である。一方、右枝分れの場合、cycle 1の適用により、再適用の環境が破壊されているため、cycle 2の適用が阻止される(34-b)。

二、左、右枝分れを問わず、もし指定された適用領域での適用が終わった段階で、所定の範囲以外になお二つ以上の3調音節が残っていたら、これらの3調連続が独立のTGを形成し、それぞれTSRの適用を受ける、((33-a), (34-a))。

TSRの適用領域を構成素の単位に求めることにより、FFR及びSUCに比べて、我々はより多くの事実を無理なく説明することができる。例えば上の節で挙げた(10), (11) (以下(35), (36)として再録)のような例について、FFRでは通常の適用なら、第二サイクルでの適用が不可能なため、[3 [2 3]]の形式しか認められず、(b)の[2 2 3]形式については説明できない。

(35) 私／買う／酒……私が酒を買う。

[wo [mai jiu]]

(a) [3 [2 3]]

(b) [2 2 3]

- (36) いつも／思う／行く……いつもいきたいと思う。

[zong [xiang zou]]

(a) [3 [2 3]]

(b) [2 2 3]

しかし、構成素領域の条件の観点から見ると、(a) の形式と (b) の形式はそれぞれいずれかのレベルの構成素単位と対応しているため、両方の形式とも簡単に説明される。

また、HnngのSUCでは、次の(37), (38)について、(b) の形式が十分可能な形式であるのにもかかわらず、意味単位の解釈が成り立たないため、説明不可能になるが、構成素領域の条件では、(a) も (b) も構成素単位と対応しているので、むりなく説明される。

- (37) 買う／小さい／傘……小さい傘を買う。

[mai [xiao san]]

(a) [3 [2 3]]

(b) [2 2 3]

- (38) 買う／二／碗……二碗買う。

[mai [liang wan]]

(a) [3 [2 3]]

(b) [2 2 3]

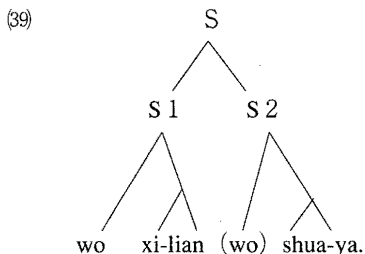
更に、構成素領域の条件では、一つの条件だけで、すべての可能な形式を説明できる上に、これらの形式に対する絶対的な自然性の評価を避けることができる点で、より言語事実に忠実的である。

声調交替の問題のなかで、いわゆる前置詞句、数量詞句を含む構文におけるTSR適用領域の指定は、とりわけ「アキレス腱」的な存在で、これまで議論が最も集中する点でもある。これからの節でこれらの問題を中心に更にTSRの適用領域の指定について考えることにする。

3. 前置詞文のTSR適用領域

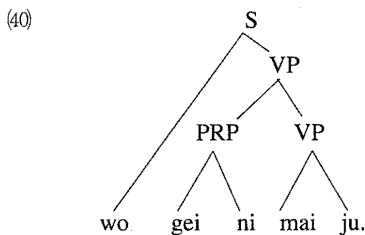
北京語の前置詞文について、その歴史的な理由から、ここでは「二動詞句連続」の構文（連動文）と併せて考えなければならない。

「二動詞句」構文とは、本来同一の主語を持つ二つの動詞文がその二番目の文の中の主語が「同素消去」のため、表層に表われず、表面的には同一の文に併合された形になった文のことである。次の例でわかるように、純粋な二動詞文の場合、前の文と後の文は意味的に同格関係にあって、一方の文が他方の文の付属節にはならない。



私／顔を洗う／私／歯を磨く……私は顔を洗い、（私は）歯を磨く。

一方、前置詞言語と後置詞言語がある中で、北京語はいわゆる前置詞的な言語とも言われる、その前置詞句に相当する「介詞節」(PRP)は統語論的にも後続する動詞句(VP)の付属節として解釈されるのが一般的である。次の(40)で示されている通りである。



私／為に／あなた／買う／酒……私はあなたの為に酒を買う。

3 3 3 3 3

- (a) (3 (2 3) (2 3))
- (b) ((2 2 3) (2 3))
- (c) * (3 (2 2 2 3))
- (d) **((2 3) (2 2 3))
- (e) (2 2 2 2 3)

このような構文に対するいくつかの可能な声調交替形式のうち、(b) と (c) を比較してみると、構成素の構造に近いTGをTSR適用領域とする (c) の形式が寧ろ不自然で、そして一見、構成素構造と矛盾する (b) の形式の方がかえって自然な形式になっていて、TG形成の構成素領域の条件に対する反例とも言えるようである。

しかし、実際のところ、北京語の「前置詞」構文は、統語論的に二動詞文（連動文）とどう区別されるか必ずしもはっきりしない、従来前置詞文と二動詞文を区別したのも、統語論的な理由より、意味上の理由であった。次の例を見てみよう。

- (41) da shui xi lian.

汲む／水／洗う／顔……水を汲んで顔を洗う。

- (42) yong shui xi lian.……水（を用いて）で顔を洗う。

用いる／水／洗う／顔

(41)の文が普通「二動詞」文と見なされるのに対して、(42)は前置詞文と見なされる。(41)では先行の [da] (汲む) と後続の [xi] (洗う) が共に動詞として解釈されるが、(42)では、先行の [yong shui] (水を使って、水で) はこれに後続する動詞句 [xi lian] (顔を洗う) に対して、その動作、行為が行われる「方法、道具」を表しているため、従って、一般的な解釈では、[yong shui] (水を使って、水で) が付属節で、その中の [yong] も当然動詞ではなく、「前置詞」と解釈される。

ここで明かなように、北京語の前置詞及び前置詞句の定義は統語論的な理由ではなく、実は意味に基づくものである。つぎの四つの文は統語論的に寧ろ

同じ構造を持っているのにも関わらず、普通 (a), (c) だけが前置詞文として解釈されるのも、意味的な理由以外の何でもない。

- (43) (a) wo [gei ni]_{PRP} [mai jiu]_{VP}.

私は<あなたに><酒を買う>。

- (b) wo [mai jiu]_{VP} [gei ni]_{VP}.

私は<酒を買って>, <あなたにあげる>。

- (c) [yong shui]_{PRP} [xi lian]_{VP}.

<水で><顔を洗う>。

- (d) [da shui]_{VP} [xi lian]_{VP}.

<水を汲み>, <顔を洗う>。

更に、動詞句の付属節であるはずの「前置詞句」及び前置詞そのものが単独構文能力があることも、北京語の「前置詞」は統語論的な定義ではなく、意味上の定義であることが裏付けられる。

- (44) Q: ni [yong]_{PRP} qian-bi [xie]_V zi ma ?

あなた／用いる／鉛筆／書く／字／（語気）

あなたは鉛筆で（を使って）字を書きますか？

A 1: [yong]_R.

??で。（使う。）

A 2: bu [yong]_R.

??でない。（使わない）

A 3: **xie.

書く。

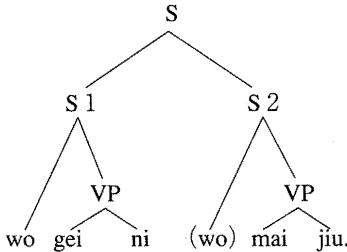
A 4: yong qian-bi xie zi.

鉛筆で書く。

上の文の答えの方では、動詞として解釈される [xie] が省略されても構わないが、前置詞と解釈される要素が省略されると、かえって不適格となる。また、「前置詞」だけで答えることも可能である。

従って、こうして意味上の理由によって定義される「前置詞句」は、実際統語論的に動詞句と同じ性格をもつことがわかる。上の各「前置詞句」を含む例は、統語論的にはむしろ二動詞文として解釈されるべきである。その構成素構造も次に示すように解釈される。

(45)



私／へ／あなた／私／買う／酒……私はあなたに酒を買（ってあげる。）

3 3 3 3 3 3

(a) (3 (2 3) (2 3))

(b) ((2 2 3) (2 3))

(c)* (3 (2 2 2 3))

(d)** ((2 3) (2 2 3))

(e) (2 2 2 2 3)

表面形式で、二番目の [wo] が「同素消去」によって消去されている。このような統語構造の表面形式に置いて、(c), (d) が共に構成素領域の条件に違反している、従って不適格で、適格形のどの形式も、かならずいずれかの構成素単位と対応していることが明らかである。

次は数量詞を含む構文の問題について見ることにする。

4. 数量詞句のTSR適用領域

数量詞句の問題点もやはりその数量詞句が統語論的にどのように解釈されるかである。一般的に、「数量詞句」は次の例のように、述語動詞と目的語の中

間に現われる。また、「数」の部分が省略されて、「量詞」だけが現われるときもある ((47, 48))。このようなとき、数量詞句は述語動詞の付属節であるか、それとも目的語動詞の付属節であるかは、必ずしもはっきりしない。

- (46) 買う／二／碗／酒……酒を二碗買う。

mai liang wan jiu.

3 3 3 3

- (a) (3 (2 2 3))
 (b) ((2 2 2) 3))
 (c) (2 2 2 3)

- (47) 買う／碗／酒……少し酒を買う。

mai wan jiu.

3 3 3

- (a)* ((3 (2 3))
 (b) ((2 2) 3)
 (c) (2 2 3)

- (48) 買う／少し／米……少し米を買う。

mai dianr mi.

3 3 3

- (a)* ((3 (2 3))
 (b) ((2 2) 3))
 (c) (2 2 3)

このような数量詞は、一般的に後続名詞の付属節として解釈される、すると、上の例の (47-a), (48-a) がなぜ不適格かについて、構成素領域の条件では説明できないように見える。

ところが、数量詞 (又は量詞) につて、それが先行動詞とも、後続名詞とも単独で現われうることができ、そのとき、それぞれのふるまいが違う点に注目する必要がある。即ち、数量詞句も、量詞節も先行動詞の付属節として現われ

ることが可能であるが、後続名詞の付属節として現われるのは、数量詞句に限られる。次の例の通りである。

- (49) (a) 買う／一／碗
mai yi wan。

(b) 買う／碗
mai wan。

- (50) (a) 一／碗／米
yi wan mi。

(b) 碗／米
* wan mi。

また、北京語の数量詞は意味的に実際正確な「数」と「量」を表すこともあれば、単なる後続名詞の大ざっぱな数量を示すときもあることは、周知の通りである。このような場合、もし数／量詞とも3調音節なら、その交替形式が異なる。このことを次の例を用いて見てみよう。

- (51) 正確な数量：買う／二／碗／米……二碗の米を買う。

mai liang wan mi。
3 3 3 3
[3 [2 2 3]]

- (52) 大体の数量：買う／二／碗／米……少し米を買う。

mai liang wan mi。
3 3 3 3
[[2 2 2] 3]

これらの事実によって明らかなように、所謂「数量詞」とは、統語論的に先行動詞の付属節である場合と、後続名詞の付属節である場合がある。先行動詞の付属節である場合、数量詞の「数」と「量」の意味は、それほど重要ではない、従って(47)の例が示しているように、数の部分が省略してもよい。他方、後続名詞の付属節として現われる時に、意味的に「数量」を表すため、従って(51)

の示すように、「数」の部分を省略できない。すると、(51)と(52)の構成素構造は次のように改めて示すことができる、これにより、構成素単位とTG、即ちTSR適用領域の対応関係も改めて確認できる。

- (53) 数量：買う／二／碗／米……二碗の米を買う。

[mai [liang wan [mi]]]

3 3 3 3]

[3 [2 2 3]]

- (54) 類型：買う／二／碗／米……少し米を買う。

[[[mai] liang wan] mi]

3 3 3 3

[[2 2 2] 3]

5. 構成素の制約

構成素領域の条件はFFR、及びSUCに比べて、TSRの適用領域に対して実質的に非常にゆるい制約しか課していない。例えば次の三つの右枝わかれ構造の例(53), (54), (55)において、Shih (1986) のFFRでは3例のそれぞれの領域1 (domain 1=dmn 1) と、領域2 (domain 2=dmn 2) のなか、領域2での適用がすべて阻止されていることになっている。従ってFFRに従えば、すべての(b)の形式が不適格となってしまふ。これに対して、Hung (1989) のSUCでは、(55), (56)の領域2での適用を否定するものの、(57)の領域2での適用は可能であるとなっている。従って、(55), (56)において、(b)の形式が不適格とされてしまふが、(57)の(a), (b)とも適格である。

もちろん、次の例で示されているように、両者の説ともこの言語の事実を説明するのに不十分である。

- (55) 紫／チョーク……紫色のチョーク

[zi [fen bi]_{dmn1}]_{dmn2}

3 3 3

(a) [3 [2 3]]

(b)* [2 2 3]

(56) 探す／小さい／犬……小犬を探す。

[zhao [xiao gou]_{dmn1}]_{dmn2}

3 3 3

(a) [3 [2 3]]

(b) [2 2 3]

(57) 私／買う／酒……私は酒を買う。

[wo [mai jiu]_{dmn1}]_{dmn2}

3 3 3

(a) [3 [2 3]]

(b) [2 2 3]

ところが、FFR, SUCの問題点とは別に、本稿が提案している構成素領域の条件でも、そのまま適用すると、3例のなかの (a), (b) とも適格形になる、即ち、本来不可能な (55-b) のような不適格なものも派生してしまうことになり、従って、問題が残っている。

実際、上の3例のなかで、領域2での適用が阻止される(55)の例と、領域1、領域2の適用とも可能である(56, 57)とでは、それぞれの内部に含まれる最下段の構成素の性質が違う。領域2での適用が阻止されるのは、(55)のように、内部の構成素 (fen-bi チョーク) が語彙項目である場合だけである。(55)では、その内部最下段構成素の (fen-bi) では、統語論的にも、形態論的にもそれ以上分析することが出来ない語彙項目であるが、(56)の (xiao gou) (小さい／犬) も、(57)の (mai jiu) (買う／酒) も、内部構成が更に統語論的に分析可能な統語構造体である。これらの事実と対応して、領域2での適用が可能であるか否かが違ってくる。

このことは即ち、TGの形成が語彙項目と統語的構造体の違いを識別し、相

対的に独立性が強い多音節語彙項目は、それ自身で独立のTGを形成する傾向が強く、他の要素と同一のTGに編入されることが難しいことを意味するものと考えることができる。従って、TSR適用領域の指定に、構成素領域条件のほか、構成素の内容も関与していることが確認できる。語彙項目で充てられる構成素が、「構成素の制約」として、より上部の構成に基づくTGとの統合を阻止する。現象として、TSRが部分的に右枝分れ構造の構成素境界を越えて適用されないことになる。構成素構造の条件は、次のように述べることができる。

(58) 構成素の制約

もし構成素xが構成素yに直接支配されており、構成素xが語彙項目である場合、構成素xは独立のTGを維持する。このとき、たとえより上位の統語構造のレベルにおいてxとyが同一の構成素に含まれていても、同一のTGへ編入することは出来ない。

ただし、語彙項目の判断はあいまいな部分があり、また個人差も考えられるので、従って、声調交替形式のあいまいな点、個人差も当然考えられる。このため、次の例の (a), (b) の声調形式の適格性について、母国語話者の間でとく不一致が生じるのも不自然なことではない。

(59) 古参の／工場長……古参の工場長。

[lao [chang zhang]]

(a) [3 [2 3]]

(b) [2 2 3]

(60) 小さい／(雨)傘……小さい(雨)傘。

[xiao [yu san]]

(a) [3 [2 3]]

(b) [2 2 3]

6. おわりに

言語の韻律的特徴は、さまざまな現象として実現される。声調交替規則の適用領域の指定も、根本的に韻律現象の一つであるが、適用領域の指定が統語構造の構成素単位と一致することは、韻律構造の文法的機能の側面を表すものと考えられる。

本稿では、声調交替形式と統語構造との対応を中心に考察した。適格形式の中に、更に談話的、語用論的な要因によって、より自然な形式が選択されることもあるが、こうした談話的、語用論的な関連については、今後の課題とした。

(注1)：北京語の声調交替の現象及び声調交替規則の適用について、拙稿（馮1991）および（馮1988）でも若干触れている。その時点では、レキシコン（Lexicon）における声調交替規則と語アクセント（重音）規則の適用順序など、声調交替と軽声化現象の内的関連性が問題の中心であったため、声調交替について深入りできなかった。

本稿は、声調交替の問題に焦点を絞って、特に規則の適用領域の指定及び規則の適用について考察するものである。

(注2)：4種類の声調はそれぞれ[1, 2, 3, 4]をもって示す。なお、分節音の表記については、本稿では直接関連がないため、中国語ローマ字表示（漢語ピンイン）を用いる。

参考文献：

- Chen, C.Y. (1984) Neutral tone in Mandarin: Phonotactic description and the issue of the norm.
Journal of Chinese Linguistics 12. 299-333
- Hung, T.T.N (1989) : Syntactic and Semantic Aspects of Chinese Tone Sandhi.
INDIANA UNIVERSITY LINGUISTICS CLUB PUBLICATIONS.
- 窪園晴夫 (1992) : 「ブロンディーの普遍性」 月刊『言語』 1992. 8. Vol. 21. No. 9.
- 馮 蘊澤 (1988) : 「中国語 “重ね型単語” の形態と音韻現象」 『九大言語学研究室報告』
第9号 九州大学文学部言語学研究室編 九州大学文学部発行
- …………… (1991) : 「北京語の語アクセントと声調交替について」 『九大言語学研究室報告』
第12号 九州大学文学部言語学研究室編 九州大学文学部発行
- Shih, C.L. (1986) : The prosodic Domain of Tone Sandhi in Chinese. Ph.D. dissertation,
University of California at San Diego.